連載㊽

内海善雄（ITU前事務総局長）のやぶ睨み「ネット社会」論

一賢、虚に吠ゆれば、万民、実を伝う

関西電力顧問の小林庄一氏が、昨年の電力業界紙のインタービューで面白い諺を引用していた。

「原子力に対する国民の不信はマスメディアの影響も大きい。―中略― 原子力に限った話でないが、『一犬虚に吠ゆれば万犬実を伝う』（一人がいいかげんなことを言うと、世間はそれを真実として広めてしまう）という状況に陥っているのではないか」（「電気新聞」二〇一三年十二月十七日）

現況にぴったりの古い諺

まことに現況をうまく表現する諺だと思う。しかし、この諺の原典はやや違った意味合いであったはずだ。なぜなら、後漢時代に王符という人が著した潜夫論に出てくる言葉であるからだ。日本では卑弥呼の時代だから、当然、新聞やテレビなどのマスメディアは存在しない。現代に置き換えれば、大災害などでマスメディアが機能しない状況に当てはまる諺であるはずだ。

しかし、新聞などの権威者の発信する情報を鵜呑みにする現代の現象を表すのに、あまりにもぴったりした言葉である。「一犬」では失礼だから、「一賢」と置き換え、「一賢虚に吠ゆれば、万民実を伝う」とすれば、まさに満点の表現となる。

私の専門である情報通信分野では、この諺に該当する事例は枚挙にいとまがない。例えば、「携帯電話は世界標準に従わなかったから世界に進出できなかった」など、本誌昨年九月号でも多くの例を紹介した。

ところが、専門分野外で実例を探すとなると、なかなか思い当たらない。悲しいかな、真実を知らないからだ。世の中、どこかに正確な情報があるにちがいないが、自分で発見することは難しい。また、たとえこれが真実だと誰かに示されても、真実を知らない者にはにわかに信じられないことが多い。われわれはそれほど世間一般の多数説にどっぷりと漬かっているのだ。

有名な真珠湾攻撃を一例に挙げると、一般人の真実に対する非力さがよく分かる。ルーズベルト大統領は攻撃を事前に察知しながら、わざとその事実を伏せたという、いわゆる「陰謀説」がある。大統領は、マスコミを利用して不意打ちをした「卑怯な日本」というイメージを創り上げ、国民の戦意を鼓舞したというのである。複数の米学者が唱えているが、一般人には検証のしようがない。よって、米国の陰謀であったと主張することはとてもできないのが現実である。

容易に正せる誤りもある

やや無力感に襲われながらネットを探してみると、金美齢氏が、蔓延する「日本人の偏狭なナショナリズム」という表現は、「一犬虚に吠ゆれば万犬実を伝う」の好例であると評論していた（「産経新聞」〇一年八月二十日）。

氏は多くの行動例を示して、他国民と比較して日本人は紳士的で、決して偏狭ではない。しかるに、「偏狭なナショナリズム」という言葉をいい加減に使うものだから、外国からもそのように批判されると説く。一般人でもなるほどその通りだと納得でき、知らぬ間にマスメディアに誤った評価を植えつけられていたことが分かる。

このように事実関係ではなく、物事の評価に関するものは、理解さえすれば容易に呪縛から解ける。すぐさま連想して浮かび上がるのが、安倍晋三総理の靖国参拝に対する米国の反応の報道である。

参拝後、メディアは中韓の批判反応を速報した。当然予想されたことだから、国民もメディアも冷静な反応だった。やがて「米国政府が失望した」という報が伝えられると、にわかに鬼の首を取ったように総理の参拝に批判的な記事一色となった。

米国の真意は英語を理解していれば理解できたはず（C-SPANより）

どの記事にも、米国が「遺憾」ではなく「失望」という強い言葉で総理を批判したのは異例であるとの解説があり、「これで日米関係が壊れる、総理はとんでもないことをしてくれた」というトーンである。日頃、日米関係を重視しない社でも同様であった。

いい加減すぎるメディアの解説

すべては、米国が「失望」という強い言葉で総理を批判したことを根拠とする論調だが、それはいい加減なものだと思う。「偏狭なナショナリズム」と同様の類ではないだろうか。

原文の英語表現は「the United States is disappointed」である。be disappointedは親しい友人間の日常会話でごく普通に使う言葉で、日本語では、「期待に反して残念だ」というニュアンスだ。自分の感情を表現したにすぎない。

一方、「遺憾である」は英語ではregrettsomethingとなり、「××はけしからぬ」というニュアンスである。特定の言動を指して批判する言葉であり、対象が自分のことであれば日本語では反省を意味する。むしろ「regret」のほうが「disappointed」よりも強い反応だと思う。

したがって米国（実は在日米大使館）のステートメントは、「中韓と日本との良好な関係を期待している米国としては、今回の参拝は残念である」という程度の意味であろう。しかるに、disappointedを「（総理の行動に）失望した」と強い日本語に訳し、とんでもないことをしてくれた総理だと報道するメディアは、総理の失態を熱望しているとしか思えない。

この報道振りに多少の自己疑問を感じたのか、なんと五日後の年末三十一日に、米国務省のハーフ副報道官（写真）の記者会見の場で日本のメディアがステートメントの真意を尋ねる質問をしている。当然のことながら、「文字どおりdisappointedは近隣諸国との関係悪化に懸念を表明したのだ」との回答であった。その言を受けて、今度は「失望は靖国参拝そのものではない」とか、「日米は緊密なパートナーだ」などを強調する報道である。

米政府の一言隻句に右顧左眄し、その真意を確かめもせず無節操に自己の価値判断の拠りどころを求める姿は隷属国民的で、なんとも情けない。マスメディアは、「一犬虚に吠ゆれば万犬実を伝う」をまさに地で行っているようなものだ。

内海善雄（うつみ よしお）

1942年香川県高松市生まれ。東大法学部卒。東芝を経て66年郵政省（現総務省）入省。電気通信の自由化など、通信放送政策を長く担当。98年国際電気通信連合（ＩＴＵ）事務総局長就任。現在は一般財団法人「海外通信・放送コンサルティング協力」理事長。ＩＥＥＥ名誉会員。